

The Modernist Studies in Asia Network (MSIA)

第二回国際学会 Modernism and Multiple Temporalities の企画・開催・運営に関する 研究プロジェクト報告書

Final Report of the Research Project: Planning, Organizing and
Managing of the Second International Conference of the Modernist
Studies in Asia Network (MIA),
“Modernism and Multiple Temporalities”

東京大学総合文化研究科准教授 秦 邦生
Kunio SHIN

1. 本研究プロジェクトの概要

本研究プロジェクトは、2019 年 9 月 12 日～14 日に青山学院大学 17 号館を会場として開催予定の国際学会 “Modernism and Multiple Temporalities” の企画・開催・運営を行うものだった。研究代表者は、2019 年度まで青山学院大学文学部英米文学科准教授だった秦邦生（2020 年度から東京大学総合文化研究科に異動のため、2020 年 3 月末で退職）が務め、チーム構成員としては、麻生えりか先生（英米文学科教授）、Mary Knighton 先生（同）、齊藤公平先生（英米文学科准教授）、来馬哲平先生（同）の全 5 名が参加した。

申請の結果、プロジェクトには文学部附置人文研究所から約二十五万円の予算が付与され、その予算を主に①広報・宣伝活動の強化、②特に海外在住の大学院生を対象とした旅費補助の支給、③参加料減額による一般参加者（とりわけ学生）の増加を目的として使用した。これらの活動がこの国際学会の成功に大いに寄与したことをまず明記し、プロジェクトにご採択いただいた諸先生方に深く感謝したい。

本報告書ではまず、この国際学会の企画・準備・実施について概略を述べ、その後、本研究プロジェクトの三つの目的が果たした役割を説明する。

2. 国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の企画とその背景

本国際学会は、2017年秋に創設された the Modernist Studies in Asia Network (アジア・モダニズム研究ネットワーク、以下 MSIA と略記) の第二回国際学会として 2018 年 5 月に企画された。そもそも MSIA は 2017 年秋に本研究代表者の秦邦生が、香港教育大学の Emily Ridge、復旦大学(上海)の Nan Zhang、国立政治大学(台湾)の Shun-liang Chao、南洋理工大学(シンガポール)の Kevin Riordan とともに創設した研究ネットワークである。その創設の目的は、アジアの諸国・地域在住のモダニズム研究者間の研究交流を図ると同時に、英語圏をはじめとした他地域のモダニズム研究学術団体とのネットワークを確保することだった。

この背景には、近年のモダニズム研究の急速な国際化と多様化があった。従来「モダニズム」とは、英米やヨーロッパにおける一握りの文学者・芸術家などの作品や文学・芸術運動などを指すことが一般的だった。だが二〇世紀末以降、それを時間的にも空間的にも拡張した概念として捉え返す動向が続いている。それにともない、アメリカを中心とした Modernist Studies Association (1998 年創設)、イギリスの The British Association for Modernist Studies (2010 年創設)、オーストラリアの The Australasian Modernist Studies Network (2011 年創設) など、英語圏ではモダニズム関係の研究団体の新設が相次いでいたが、アジア地域においては多言語の障壁もあり、そうした団体がまだ創設されていない状態だった。

これに対して、2017 年秋に秦が創設に参加した The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) はこうした空白を埋める試みである。その創設大会は 2018 年 6 月に Emily Ridge が当時在職した香港教育大学で開催され、アジア各地のほか、アメリカ、イギリスなどの英語圏からも参加者があり、総計で 50 名ほどの発表がなされた。その成功を次につなげるために、二回目の年次大会として秦が青山学院大学での開催を MSIA の運営委員会で提案し、了承された。

2018 年時点で秦は二つの科学研究費補助金の研究計画に分担者として参加していた。東京大学の田尻芳樹教授が代表をつとめる基盤研究 B「現代英語圏文学におけるモダニズムの遺産継承に関する包括的研究」(課題番号 16H03393)ならびに、成蹊大学の遠藤不比人教授が代表をつとめる基盤研究 B「英国モダニズムにおける反心理学の系譜に関する学際的かつ国際的研究」(研究代表者・課題番号 18H00653)である。この研究計画のメンバーとの教義の結果、全員が参加のうえで「国際学会 Modernism and Multiple Temporalities 運営委員会」を組織することになり、おもに海外からの基調講演者 3 名の招聘資金をまかなうことになった。

また開催地となる青山学院大学からは文学部英米文学科准教授の齊藤公平氏が運営委員会

に参加し、国際学会ウェブサイトならびにオンラインでの参加登録料システムの構築と運営に多大な貢献をおこなった。

国際学会のテーマとしたのは、「モダニズムと複数形の時間性」だった。モダニズムにおける「時間性 (temporality)」の問題は、伝統的には心理学的時間の観点から「意識の流れ」やテキストの断片性など形式的特徴に注目するアプローチから研究されてきたが、近年では広義のモダニティの経験自体が「時間性の政治学」(Peter Osborne) に規定されてきた経緯に注目が集まっている。「時間による空間の抹消」に関する Karl Marx の観察以来、支配的な時間性 (例えば Walter Benjamin のいう「均一で空虚な時間」や E. P. Thompson のいう「時間規律」など) が、資本主義、植民地主義、帝国主義などと共謀してきた様について、多くの批評家たちが研究を重ねてきた。そのような研究はまた、世界各地におけるモダニズムの内包する複数の時間性がそういった支配的イデオロギーに対抗してきた複雑な経緯にも注目している。

今回の国際学会はこのような動向を受けて、モダニズム研究の一層の拡張と刷新を試みるものだった。2008 年の著名な論考 “New Modernist Studies” において Douglas Mao と Rebecca Walkowitz は時間軸、空間軸、垂直軸 (文化の高低に関する階層秩序) の観点から従来のモダニズム研究を拡張・刷新する洞察を示した。この国際学会は特にこの「時間軸」と「空間軸」との交錯に注目し、モダニズム概念自体の近年の急速な拡大が、世界各地での経験的時間の複数性に関する研究を要請していることを強調した。昨今浮上している「グローバル・モダニズム」という問題領域自体が、個別具体的なモダニティの「場」で生み出された複数の時間性同士の競合や葛藤によっていかに規定されていたのかが、この国際学会の中心的な問題提起となった。

以上の趣旨を記載した英文の発表公募 (CFP: Call for Papers) は 2018 年夏にインターネットで公開され、2018 年末までに世界各地から約 120 件の応募があった。発表応募者の在住地別内訳は、日本 31 名、アメリカ合衆国 12 名、イギリス・シンガポール各 10 名、香港・中国・オーストラリア各 9 名、台湾 6 名、インド 4 名、イスラエル 3 名、フランス・ドイツ・トルコ・ベルギー・カナダ各 2 名、韓国・ギリシア・スウェーデン・ウガンダ・ポルトガル・ハンガリー各 1 名であった。またその内容も、英米文学・文化研究を中心としつつ、(特に東西文化交流の見地からの) 比較文学研究、映画史、美術・デザイン史など多岐にわたっており、この時点ですでにかなり国際色豊かな大会となることが予想された。

3. 国際学会 “Modernism and Multiple Temporalities” の準備と実施

この国際学会では個別の研究発表のほかにも、他の国際学会との連携も重視し、プログラムには北米を中心とした The Modernist Studies Association (MSA) のスポンサー・パネルが1つ、国際 Ezra Pound 協会のスポンサー・パネルが2つ、日本ヴァージニア・ウルフ協会と韓国ヴァージニア・ウルフ協会のジョイント・パネル1つが含まれることになった。また初日には院生ラウンドテーブルも開催し、次世代を担う研究者の育成にも貢献を試みた。

このほかに重要なのが、モダニズム研究をリードする研究者たちによる基調講演 (keynote lectures) だった。運営委員会での教義の結果、基調講演者は英米文学研究の分野から Douglas Mao 氏と Laura Marcus 氏の2名、アジア映画史研究の分野から Aaron Gerow 氏、計3名の基調講演者を依頼することになった。参考までに、この3名の所属大学ならびに主要業績を次に列挙しておく。

* 参考：基調講演者3名の所属大学、講演タイトルならびに主要業績

- (1) Douglas Mao (Johns Hopkins University) “Time’s Mystique”
Solid Objects: Modernism and the Test of Production (Princeton University Press, 1998)
(Ed.) *Bad Modernisms*. Co-edited with Rebecca Walkowitz (Duke University Press, 2006)
Fateful Beauty: Aesthetic Environments, Juvenile Development, and Literature, 1860-1960 (Princeton University Press, 2008)
- (2) Aaron Gerow (Yale University) “Explorations of Modernity in Japanese Film Theory”
A Page of Madness (BFI, 2007)
Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895-1925 (the University of California Press, 2010)
The Research Guide to Japanese Film Studies. Co-authored with Mark Nornes (Center for Japanese Studies, 2009)
- (3) Laura Marcus (University of Oxford) “Modernism’s Rhythmical Subjects”
Auto/biographical Discourses: Theory, Criticism, Practice (Routledge, 1994)
Virginia Woolf: Writers and their Work (Northcote House, 1997/2004)
The Tenth Muse: Writing about Cinema in the Modernist Period (Oxford University Press, 2007)

(Ed.) *The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature*. Co-edited with Peter Nicholls (Cambridge University Press, 2004)

その後、準備期間を経て、2019年9月12日（木）から14日（土）の3日間にかけて、青山学院大学青山キャンパス17号館5階教室を会場として開催された。2019年8月31日付けで作成・印刷されたプログラム以降、数名の発表辞退者があり、また開催数日前には関東地方を大きな台風が襲い、予定より早く到着していた海外からの参加者のなかには、成田空港で不安な一夜を過ごした者も数名いたらしい。こうした事前のトラブルはあったものの、天候にも恵まれた本国際会議は順調にプログラムをこなし、3日間に渡る学術交流は奇跡的に大きなトラブルに見舞われることもなく、無事に終了した。

プログラム全体では基調講演3件、個別の発表83件（全28のパネル）、院生ラウンドテーブル発表10件（2つのラウンドテーブル）、計96名による講演または研究発表がおこなわれた。この内容については、本報告書に当日に実際に行われた通りのプログラムを参考資料として添付する（本報告書の末尾を参照）。

最終的に参加した講演者・発表者たちの所属大学所在地を具体的に挙げると、日本、香港、中国、台湾、韓国、シンガポール、インドなど東アジア各地のほかに、アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアなどの英語圏各国、フランス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、ギリシアなどヨーロッパ諸国、さらにトルコやイスラエルなど中東地域からも発表者が来日・参加し、総計で17の国・地域からの研究者が一同に会するきわめて国際色豊かな学会となった。

このほかに、パネル司会（非発表者）としての参加者8名、来聴事前登録者約30名、さらに当日来聴者約30名を加えると、総計160名以上の学会関係者の参加があり、連日どのパネルでも活発な議論が交わされていた。

この国際学会の中核となったのは前述の通り、三名の著名研究者による基調講演である。まず初日9月12日にはJohns Hopkins University教授Douglas Maoによる“Time's Mystique”と題する講演が行われ、特にWallace StevensとVirginia Woolfにおける世俗的時間経験と死や宗教性との葛藤に関して濃密な議論が展開された。

次に2日目にはYale University教授Aaron Gerowが“Explorations of Modernity in Japanese Film Theory”と題する講演を行い、西欧と非西欧との文化的非対称関係を反映した「理論コンプレックス」について刺激的かつ挑発的な問題提起がなされた。

さらに最終3日目には、University of Oxford教授Laura Marcusが“Modernism's Rhythmical Subjects”と題する講演を行い、20世紀初頭における詩の理論や文化人類学、D. H. Lawrenceの旅行記に至る多種多様な文献における「リズム」の両義的可能性に関して魅力的な思索が披瀝された。

これらの講演はいずれも、今回のメイン・テーマである「モダニズムと複数の時間性」という問題をイギリス・アメリカのモダニズム文学から日本の映画理論、さらに現代におけるモダニズム文学の継承に至るまで敷衍して考察するものであり、この国際会議における議論のさらなる活性化と深化に大きく寄与するものだった。

4. 本研究プロジェクトの貢献

2019年度に新設された青山学院大学文学部附置人文研究所の研究計画として採択された本研究プロジェクトでは、この国際学会の成功を期するために、特に以下の三つの活動によってこの国際学会の認知度を高め、多数の参加者に向かって開かれたイベントとすることをねらいとしていた。

第一の活動としては、2019年9月12日～14日の開催当日に向けた広報・宣伝活動の強化があった。そもそもこの国際学会には、秦が2018年度の研究費を活用して作成したポスターのイメージならびにそれを活用したオンライン参加登録用のウェブサイトがあった。このデザインは大正時代の日本で製作された『商店図案撰集』という書籍に掲載の図案を、株式会社キュレイターズ代表の水野昌美氏にご紹介いただき、SOY DESIGNのデザイナーである宇澤佑佳氏にご作成いただいたものであり、大正時代の日本モダニズムのデザインを意識したものだった。

これをもとに、本研究プロジェクトでは、とりわけ日本国内を拠点とする関連分野の研究者・教育者・学生などの大学関係者や文学・文化への関心を持った人びとをターゲットとして、ポスターならびにチラシを大部数印刷し、各研究機関や関連学会をつうじた配布をおこなった。発表予定者以外にも参加を促すことは、イベント認知度向上のみならず、発表者たちと一般聴衆との積極的な意見交換を促すことで、より刺激的な議論の展開を促進する効果があった。

なお、このチラシとポスターは国際学会当日も大いに活用された。大会終了時に余った残部についてイギリスとドイツから参加した若手研究者がそれぞれ記念品として持ち帰りたいという希望が出た。このことからかなりの好評を博したことが分かるだろう。

第二の活動は、特に海外在住の大学院生を対象とした旅費補助(travel bursaries)の支給による参加奨励だった。今回の応募者・発表予定者のなかには、アジア圏のみならず、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなどから参加予定の大学院生が複数含まれており、旅費の工面に困難を覚えている者が少なくなかった。それらの学生の一部を対象に募集と選考を経て、一人最大1万円程度のtravel bursariesを支給することで、将来の国際的モダニズム研究を担う各国の若手研究者のネットワークへの積極的な参加を促すことができた。

2019年7月末を期限として公募した旅費補助には、参加予定の大学院生ならびに若手研究者のうち10名から応募があり、全員を採択して各1万円の旅費補助金を当日支給した。その内訳はシンガポール、台湾、アメリカから各2名、インド、トルコ、フランス、オーストラリアから各1名であり、若手研究者たちの国際学会での発表奨励のみならず、学会全体の国際化に大きく貢献したことが分かる。

第三の活動は、参加料減額による一般参加者（とりわけ学生）の増加だった。この国際学会は、部分的に科学研究費補助金や青山学院大学英文学会、日本英文学会などからの金銭的支援を受けているが、おもに青山学院大学における約85万円の施設使用料をまかなうために、発表者ならびに一般参加者からの参加登録料の徴収をおこなった（事前登録の場合、一般発表者16,000円／院生8,000円、非発表者8,000円）。

しかしながら、非発表者8,000円は3日間の国際学会とはいえやや高く、学生などの参加には大きなハードルとなってしまった。本研究プロジェクトでは、文学部附置人文科学研究所からいただいた研究活動資金の一部を施設使用料の支払いに充当することで、その分を、一般聴衆の参加料減額にまわすことに決定した。結果として学生の来聴希望者の参加費は3日で5,000円、1日で2,000円に減額し、学生向けの参加奨励に寄与することになった。

以上三つの活動は、この国際学会を成功裏に終わらせるために不可欠なものであった。ここであらためて、プロジェクトにご採択いただいた青山学院大学文学部附置人文研究所の諸先生方への深い感謝の念を書き記すとともに、プロジェクトに多大な貢献を行ってくれた本課題の秦以外のメンバーである、麻生えりか先生、Mary Knighton 先生、齊藤公平先生、来馬哲平先生の多大なる貢献についても明記しておきたい。

5. 最後に

国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の企画と開催にあたっては、この報告書ですでに記した2つの科研費研究プロジェクト、ならびに青山学院大学文学部附置人文研究所からの資金のほかにも、多数の資金援助を受けた。それらは、日本英文学会からの支援金（海外研究者招聘後援事業）、青山学院大学英文学会からの後援金、英米文学科研究活動費による学生登録料援助金などのかたちで、文学部・英米文学科からの後援を受けた。記して感謝したい。

また、2019年度まで秦が所属した英米文学科の構成員からは、麻生先生、齊藤先生、来馬先生、秦の4名が他大学教員と共同で国際学運営委員会メンバーとして開催準備ならびに当日の運営にあたったほか、松井優子先生、Knighton 先生にも発表者としてご参加をいただいた。初日には伊達直之文学部長による開会の辞が読まれ、また2日目夜のレセプション

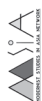
ンでは学科を代表してアレン玉井光江先生（2019年度の英米文学科主任）にもご挨拶を頂いた。複数の学科教員によるコラボレーションがあつてはじめて可能になったイベントであつたことは強調したい。

なお、国際会議終了以降おもに海外からの参加者から数多くの好意的なフィードバックが寄せられた。内容的には基調講演をはじめとするプログラム自体の知的水準への評価のほか、青山学院大学の好立地や施設の快適性、（アイビーシーエスに発注した）お弁当など飲食類への評価も高かった。このように総合的に考えると、海外の大学関係者に対する青山学院大学の知名度の向上にも一定以上の貢献をすることができたのではないかと考えられる。

客観的に見ると、このように国際学会というイベントの開催に特化したかたちでの研究プロジェクトはやや異例のもののように思われるかもしれない。だが以上で説明してきたように、青山学院大学の知的水準や好立地・快適性などを海外の一線級の研究者たちにアピールしつつ、モダニズムという当該分野でのアジアを一つの起点とした国際ネットワークの構築に資するという点で、本イベントは一定以上のインパクトを持った。日本在住の研究者が海外の国際学会に参加するのみならず、日本を舞台とした国際学会を積極的に仕掛け、ホスト役を務めることで、国際的な研究コミュニティの中でのそのプレゼンスをアピールすることの重要性は、大きく強調できると思う。

残念ながら2020年9月現在、コロナウイルスの蔓延によって研究にとどまらない全分野での国際交流が停止状態にある。将来的にこのような国際学会を開催しうる機会がいつふたたび訪れるかも分からない状態にあるが、2019年秋のこの経験をひとつのステップとして、青山学院大学を会場とする活発な国際研究交流が組織・発展されることを願ってやまない。

最後に私事となるが、この国際学会を企画した段階では予想できなかった成り行きで、2019年度を最後に筆者は青山学院大学文学部を退職することになった。このような大きな国際学会の開催のためにさまざまなご支援を頂いた文学部の先生方にあらためてお礼を申し上げたい。ありがとうございました。



1

The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) Second International Conference
‘Modernism and Multiple Temporalities’ Programme (Revised 2019/09/14)

12-14 September 2019

Aoyama Gakuin University, building 17

©2019 September 12 (Thursday)

(a) Arrival & Registration

10:00～

(b) Postgraduate Roundtables

10:30～12:00

17503 Postgraduate Roundtable A + B	17506 Postgraduate Roundtable C
Moderator: Grace Lim (National University of Singapore) Matilda Blackwell (University of Birmingham), “Fluid Temporalities, Subversive Spaces and Queer Female Community in the Asylum Bathroom” Cansu Kutlualp (Sabanci University), “The Art of Hunger: A Comparative Analysis of Bartleby the Scrivener and The Vegetarian” Misako Yora (University of Tokyo), “Creating Utopia: Play in Virginia Woolf’s <i>The Voyage Out</i>” Yusuke Sakai (Tohoku University), “An Unacted Part of Community: <i>Between the Acts</i> (1941)” Tan Teck Heng (National University of Singapore/Kings College London), “Beside/s the Modernist ‘New’: Renovation as Innovation in Ling Shuhua’s <i>Ancient Melodies</i>”	Moderator: Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University) Zoea Tania Chen (Nanyang Technological University), “Real and Imaginary Time in surrealist Andre Breton’s <i>Nadja</i>” Pang Ru Yan Jeanette (Nanyang Technological University), “‘Parturition’: Dimensionality of Pain in Mina Loy” Imogen Durant (University of Manchester), “Projecting the Past: Cinematic Influences in Lynette Roberts’ Poetry” Sarah Fanini (University of Melbourne), “Place and the Present Tense in Mina Loy’s Early Poetry” Akiko Ichikawa (Hitotsubashi University), “Temporality of ‘England’”

(c) Opening Remarks (17512)

Naoyuki Date (Dean of the College of Letters, Aoyama Gakuin University)

12:50~13:00

(d) Keynote Lecture: Professor Douglas Mao (17512)

“Time’s Mystique” (Chair: Nan Zhang)

13:00~14:30

(e) Coffee Break

14:30~14:50

(f) Parallel Panels 1

14:50~16:10

17501 1-a	17503 1-b	17506 1-c
Imagism, Futurism, and Mina Loy Chair: Asako Nakai (Hitotsubashi University) Diane Drouin (Sorbonne Université), “‘Like a Live Wire From 1938’: Distorted Temporalities in Mina Loy’s <i>Insel</i> ” Sarah Lee (Hong Kong Baptist University), “Imagist Simultaneity: Intersections with Futurism and Contemporary French Poetry” Sarah Fantini (University of Melbourne), “Mina Loy’s ‘Italian Pictures’ and the Expansive Temporality of Futurist Objects”	Modernism and Alternative Temporalities Chair: Hiromi Ochi (Hitotsubashi University) Yukari Kato (Keio University), “Collecting the Unwanted: Carlisle Indian Industrial School and Sylvester Long’s Red-Facing” Tomohiro Hashimoto (Hitotsubashi University), “Ecological Time in Michelle Cliff’s <i>Abeng</i> and <i>No Telephone to Heaven</i> ” Paul Giles (University of Sydney), “Reverse Time and the Antipodean Imaginary”	Modernist Aesthetics and the Orient Chair: Michio Arimitsu (Keio University) Nozomi Naoi (Yale-NUS College), “Creating Japanese Design: Department stores, Designers, and Global Modernism in early 20th century Japan” Karolina Pawlik (SJTU-USC ICCI, Shanghai), “Belated, Reciprocated or Out of Time? Relocating Shanghai’s Visual Modernists in Time” So Young Park (Gustavus Adolphus College), “Aesthetic Time, Global Modernism: Laurence Binyon and Asian Art”

(g) Coffee Break

16:10~16:40

(h) Parallel Panels 2			
17501: 2-a	17503: 2-b	17506: 2-c	17508: 2-d
Psychological Temporalities Chair: Marie Geraldine Rademacher (University of Tokyo) Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University), "Sentimental Time in Wallace Stevens" Leslie de Bont (University of Nantes), "Pure Time' and the Female Psyche: Idealism, psychoanalysis and feminine temporalities in May Sinclair's Fiction" Kohei Saito (Aoyama Gakuin University), "Succession, Anticipation, Renunciation: Temporalized Consciousnesses in William James and Henry James"	Colonial and Postcolonial Temporalities Chair: Avishek Parui (Indian Institute of Technology Madras) Nan Zhang (Fudan University), "'Medicine for Fate?': Colonialism, Timelessness, and Cosmopolitanism in Leonard Woolf's <i>The Village in the Jungle</i> " Akiko Mizoguchi (Tokyo Woman's Christian University), "Reimagining Modernity in the Battlefield: Multiple Temporalities in Sol Plaatje's <i>Mhudi</i> "	Ezra Pound Society Panel 2: Time and Translation in East-West Modernism Chair: Youngmin Kim (Dongguk University) Andy Houwen (Tokyo Woman's Christian University), "Ezra Pound's Vorticist Time and His Translation of the Noh Play <i>Nishikigi</i> " Ryan Johnson (University of Sydney), "Paul Claudel and Ezra Pound before Chinese Ethics and Religion" Yoshiko Kita (Chuo University), "Basil Bunting's Chomei at Toyama"	Modernism and the Classical Chair: Kevin Riordan (Nanyang Technological University) Angeliki Spiropoulou (University of the Peloponnese), "Classical Modernism: Antiquity and the Classic in Modernist Writing" Sara Ceroni (University of Massachusetts Amherst), "The Reconstitution of the Translato Imperii in Alejo Carpentier's <i>El reino de este mundo</i> "

©2019 September 13 (Friday)
(a) Parallel Panels 3

17501: 3-a	17503: 3-b	17506: 3-c	17508: 3-d
Anarchist Temporalities Chair: Kohel Saito (Aoyama Gakuin University) Toru Oda (University of Shizuoka), “Complicating Temporal Scales: Narrative Inventions of Better Humanity in Émile Zola’s <i>Les Rougon-Macquart</i> ” James Dutton (University of New South Wales), “Writing Time (Properly): Proust, Proudhon, and the Subject of Inscription” Samuel Rogers (University of the West of England), “Milton and the Modernist Epic: A Cross-Temporal Anarchist Approach”	Modernism and the Contemporary Chair: Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University) Sonoko Matsumiya (Kyoto Women’s University), “Stevens’ Internal Time in <i>The Remains of the Day</i> ” Thomas Gurke (University of Koblenz-Landau), “that rarefied amalgam of time” – Three Discourses on Time in Mike McCormack’s <i>Solar Bones</i> (2016)	Time-travelling Imaginations Chair: Kunio Shin (Aoyama Gakuin University) Cedric Van Dijek (Ghent University/Netherlands-Flemish Institute in Cairo), “E.M. Forster’s Time-Travels” Anne Witchard (University of Westminster), “‘The Ancient East in the West End’: Margaret Morris and <i>Angkor</i> (1917) at the London Coliseum” Kevin Riordan (Nanyang Technological University), “On the Matter of the Time Machine”	Poetic Temporalities Chair: Teppei Kuruma (Aoyama Gakuin University) Grace Lim (National University of Singapore), “Desperate Conversation: Transmitting the Untranslatable Elizabeth Bishop and Paul Celan” Paul Bradley Bellew (Fu Jen Catholic University), “‘Hours Built Like Cities’: Space, Time, and Disability in the Poetry of Hazel Hall” Avishek Parui (Indian Institute of Technology Madras), “‘There will be time, there will be time’: Multiple Temporalities and Masculine Embodiments in T. S. Eliot’s <i>Prufrock and Other Observations</i> ”

(b) Coffee Break

10:20 ~ 10:40

(c) Parallel Panels 4			
17501: 4-a (10:40~12:20)	17503: 4-b (10:40~12:20)	17506: 4-c (10:40~12:20)	17508: 4-d (10:40~12:00)
Japan-Korea Virginia Woolf Societies Joint Panel: How have we read Woolf in Japan and Korea? ——History, Gender, and Politics Chair: Laura Marcus (University of Oxford) Megumi Kato (Tsuru University), “Looking Back and Forward: Woolf Studies in Japan” Youngjoo Kim (Sogang University), “Woolf, Translation, and the Common Reader” Erica Aso (Aoyama Gakuin University), “Cosmopolitanism of Virginia Woolf and Kazuo Ishiguro: <i>Mrs Dalloway</i> and <i>When We Were Orphans</i> ” Janet Cho (Texas A&M University), “Collective Visual Experiences and the Possibility of Human Solidarity in <i>Mrs. Dalloway</i> ”	Human/non-human Temporalities Chair: Douglas Mao (Johns Hopkins University) Ruben Borg (Hebrew University of Jerusalem), “Prehuman Time: Joyce and the Curve of an Emotion” Mary A. Knighton (Aoyama Gakuin University), “In the Heart of the Heart of Alterity” Yoshiki Tajiri (University of Tokyo), “Virginia Woolf’s Existential Concern with Non-Human Space” Joff P.N. Bradley (Teikyo University), “On the nonhuman kairotic time of extinction”	Music and Time Chair: Gen’ichiro Itakura (Kansai University) Angela Frattarola (Nanyang Technological University), “Temporal Sounds in Virginia Woolf’s <i>Mrs. Dalloway</i> and Millen Brand’s <i>The Outward Room</i> ” Cheng Huijuan (Shanghai International Studies University), “‘Minuet de la cour’ in <i>The Good Soldier: Finding A Way to Imagine the Ruptured Time</i> ” Sue Thomas (La Trobe University), “Jazz modernism and subjective time in Jean Rhys’s <i>Good Morning, Midnight</i> ” Tsung-Han Tsai (independent scholar), “‘A movement of return’: Music and the Art of Retrospection in Dorothy Richardson’s <i>Pilgrimage</i> ”	Media, Art and Literature Chair: Mineo Takamura (Kwansei Gakuin University) Ye Rulan (Fudan University), “Intertextual Cohesion: Modern Art and Literature in Dialogue” Heidi Stalla (Yale-NUS College) & Diana Chester (University of Sydney), “Sound Puppet: A Pen Friendship between Virginia Woolf and Ling Shu Hua”

12:20~13:20

(d) Lunch

(e) Keynote Lecture: Professor Aaron Gerow (17512)
 “Explorations of Modernity in Japanese Film Theory” (Chair: Motonori Sato)

(f) Coffee Break

(g) Parallel Panels 5

17501: 5-a	17503: 5-b	17506: 5-c	17508: 5-d
Ezra Pound Society Panel 1: East-West Chronotopes in Modernism Chair: Yoshiki Tajiri (University of Tokyo) Mark Byron (University of Sydney), “The Admonitions Scroll at the Advent of Modernism” Tsuyoshi Hasebe (Kansai University), “On the Theory and Practice of Mori Kainan’s <i>Gushi Pingze Lun</i> and His Influence on Ezra Pound’s Cathay” Miho Takahashi (Kansai University), “Ezra Pound and Noh from a Japanese Perspective”	Temporalities of Surrealism Chair: Marius Hentea (University of Gothenburg) Scott Herring (Indiana University), “Outliving Surrealism: The Contemporary Collages of Indra Tamang” Natalya Lusty (University of Melbourne), “Dream Time and Surrealism’s Urban Ecologies” Helen Huang (University of Oregon), “A ‘Demi Réver’ with a ‘Burning Face’: Synchronous Affect in Le Moulin Poetry Society”	Work, Leisure and Everyday Life Chair: Nan Zhang (Fudan University) Sudipta Chakraborty (Kalyani University), “Traumatic Banality: An Analysis of Trauma and Banality in R.N. Tagore’s ‘The Broken Nest’” Masashi Hoshino (Toyo University), “Modernism and Spare Time: Storm Jameson’s <i>A Day Off</i> (1933) and the Problem of Leisure in 1930s Britain” Au Chung To (Education University of Hong Kong), “Inventing Everyday Life: A Study of Leung Ping-kwan’s Clothes Poems”	Present Tense: Cinematic and Performative Chair: Earl Jackson (Asia University/ University of California, Santa Cruz) Imogen Durant (University of Manchester), “Stepping Out of the Frame: Cinematic Time and Temporal Disruption in Dawson Jackson’s Modernist Poetry” Motonori Sato (Keio University), “Virginia Woolf and the Cinematic Present”

(h) Coffee Break

(i) MSIA General Meeting (17512)

(j) Reception

7

©2019 September 14 (Saturday)
(a) Parallel Panels 6

9:00～10:20

17501: 6-a	17506: 6-c
Progress and Anti-Progress Chair: Noriko Matsunaga (Waseda University) Elif Su Isik (Goldsmiths College University of London), “‘‘However Will We Integrate a Clock into The Body’’: an Examination of Temporal Culture in <i>The Time Regulation Institute</i> ” Noriko Nishino (University of Tokyo), “Voices That Float, Gather and Disappear: Ann Quin’s <i>Tripticks</i> and New Age Spiritualism” Meghan Kuckelman Beverage (Meio University), “Modern Poetry and the Convivial Imagination”	Genre and Periodization Chair: Fuhito Endo (Seikei University) Yu Nagashima (King’s College London), “Time- and Space-Travelling Imagination in James Hanley’s Works during the Second World War and the Aftermath” Eric Sandberg (City University of Hong Kong), “Yesterday, Today, Tomorrow: The Temporalities of ‘Golden Age’ Detective Fiction” Yuexi Liu (Xi’an Jiaotong-Liverpool University), “Drowning in memory’: Mid-century Modernism in Christopher Isherwood’s <i>The World in the Evening</i> ”

(b) Coffee Break

10:20～10:40

10:40~12:00/12:20			
17501: 7-a		17503: 7-b	17506: 7-c
(c) Parallel Panels 7 Japanese Modernisms Chair: Andy Houwen (Tokyo Woman's Christian University) Masako Hashimoto (Ritsumeikan University), "Resonance between Poems and Illustrations in Earliest Modernism of Japan in the 1910s: Sakutaro HAGIWARA and Kyokichi TANAKA in "Howling at the Moon"(1917)" Douglas Atkinson (Vrije Universiteit Brussel), "Inversion as the Modality of Sustained Flight: Karatani, Abe, and the Remains of Japanese Modernism" Fuhito Endo (Seikei University), "A Modernist Critique of Modernity: Materiality of the Invisible in British and Japanese Modern Art"		Life, Politics and Empathy Chair: Mark Byron (University of Sydney) Emily Ridge (City University of Hong Kong), "Revisiting Virginia Woolf's Late Style: Time, Empathy and <i>The Years</i> ." Kentaro Tabata (Mie University), "Temporalities of Modernist Empathy" Ira Nadel (University of British Columbia), "Modernism, Aging and the Late Style"	Women's Time Reconsidered Chair: Kaitlin Staudt (Education University of Hong Kong) Noriko Matsunaga (Waseda University), "Feminist Temporalities and Modernism: Remapping Virginia Woolf's 'Works'" Aiping Wang (Fudan University), "Once Upon a Feminist Time--The Diegetic Time in Women's Writing" Asako Nakai (Hitotsubashi University), "Timeless Workers of the World: Modernist Temporal Imagination and the Wages for Housework Campaign"
			MSA sponsored panel: Archaeologies of Avant-Garde Time Chair: Grace Lim (National University of Singapore) Lilly Markaki (Royal Holloway, University of London), "Folding Time with Duchamp and Deleuze" Marius Hentea (University of Gothenburg), "Defining the Modern: The 1922 Congress of Paris" Yuki Tanaka (Hosei University), "Against Progress: Time and Style in Djuna Barnes's <i>Nightwood</i> "

12:00~13:20

(d) Lunch

(e) Parallel Panels 8			13:20~14:40
17501: 8-a	17503: 8-b	17506: 8-c	
Victorian and Modern Chair: Anne Witchard (University of Westminster) Yael Levin (Hebrew University of Jerusalem), “Joseph Conrad’s <i>Chance</i> : Determinism, Contingency and the Dictates of Narrative Form” Yuko Matsui (Aoyama Gakuin University), “Clearing “the Spot an Angel Deigned to Grace”?: Scott as Victorian Canon and Multiple Modern(ist) Narratives” Jessica R. Valdez (University of Hong Kong), ““Our Impending Doom”: Death, Seriality, and the Proto-Dystopian Novel”	Filmic Time Chair: Aaron Gerow (Yale University) Kosuke Fujiki (Okayama University of Science), “Between Abjection and Nostalgia: <i>The Vindictive Snake</i> and the 1930s Okinawan Diaspora in Hawaii” Chak-kwan Ng (Open University of Hong Kong), ““Some Things Last”: Transience and Experiential Temporality in Fitzgerald’s “The Curious Case of Benjamin Button” and Its Film Adaptation” Earl Jackson (Asia University/University of California, Santa Cruz), “Aftermath and Interval: Hermeneutic Temporalities at the Margins of Action in <i>Ashes of Time</i> and <i>The Assassin</i> ”	Intersections of Time and Space Chair: Akiko Mizoguchi (Tokyo Woman’s Christian University) Li Shuangzhi (Fudan University), “Heterotopias of Time in Thomas Mann’s <i>The Magic Mountain</i> and Hermann Hesse’s <i>Steppenwolf</i> ” Kunio Shin (Aoyama Gakuin University), “Utopia’s Inhuman Temporality: H. G. Wells’ <i>The Shape of Things to Come</i> and Its Film Adaptation” Abbie Garrington (Durham University), “Clock Time, Clerk Time, Mountain Time: Modernist Workers Access the Alps”	
(f) Coffee Break			14:40~15:00
(g) Keynote Lecture: Professor Laura Marcus (17512) “Modernism’s Rhythmical Subjects” (Chair: Fuhito Endo)			15:00~16:30

(h) Final Roundtable (17512)

“Reconsidering Modernism and Multiple Temporalities”

Chair: Kevin Riordan (Nanyang Technological University)

Panelists: Douglas Mao (Johns Hopkins University)

Yoshiki Tajiri (University of Tokyo)

Mark Byron (University of Sydney)

Anne Witchard (University of Westminster)

Youngmin Kim (Dongguk University)

Emily Ridge (City University of Hong Kong)

16:40~18:00

In this closing roundtable six distinguished modernist scholars, working at universities around the world, will reflect on the conference's proceedings and its central theme. When are modernism's multiple temporalities? How do we engage with modernism's pasts, confront it in the present, and dream its futures? How do modernisms here, converging in and arising from Asian contexts, inform the field's current challenges and opportunities? Each of the panelists will share what they believe to be the most salient themes of the conference before we open to a broader conclusive conversation with all conference participants.